

# 方言の係助詞「ゾ」と終助詞「ゾ」との関連分布についての研究

江 端 義 夫

(2001.12.6)

A Study on the Relation of Dialects between a Kakari particle and an Ending particle of "Zo"

Yoshio Ebata

The main aim of this paper is to clarify the relation between a Kakari particle and an Ending particle in Japan.

Next three points of proposals are as follows:

- 1) The close relation of two kinds of particles has been proved to be same group clearly, because their areas of dialects distributions of "ZO" were shared with the same districts.
- 2) Dr. Susumu Ono says that an Ending particle changed into a Kakari particle. But the author claims that the Kakari changed into the Ending.
- 3) The "Ka" of Kakari particle is more familiar than "ZO" in Aichi prefecture, because of having various language forms and usages.

The new form of "ZO" is gradually declining, although it emerged in old capital of Japan.

## はじめに

日本語方言の研究において、動詞の活用体系の研究とか、敬語の助動詞の待遇関係に関する研究とかについてはしばしば問題にされてきた。しかし、本稿で問題にするような、方言の係助詞「ゾ」と終助詞「ゾ」とに何らかの関連があるのではないかというような相関関係について考察したものは、少なかったのではないだろうか。

たとえば、一文の中で、

△マー マエノ マツリナソノ ヨナ コタ ア  
ラシン ズ。(もう以前の祭りなどのような(にぎやかな)事は有りはしないよ。)(内省)

のように係助詞の「ゾ」と終助詞の「ゾ」とが見られる時に、全く別のもので、双方を関係なく取り扱ってきたのが、従来の文法研究ではなかっただろうか。少なくとも、方言研究においては、文法的機能が異なるものを関連づけて考察するなどということは、してこなかったように思われる。

しかし、方言は常に何かから何かに変化していく過程を問題にするのが本質である。停止した体系を扱うのは、学校文法や標準語文法の仕事である。現実の動態を問題にしてこそ、方言の真骨頂が発揮されるであ

ろう。そこで、係助詞の「ゾ」と終助詞の「ゾ」との方言分布を相互に比較しつつ、それらの歴史的動態を明らかにしたいと考えている。

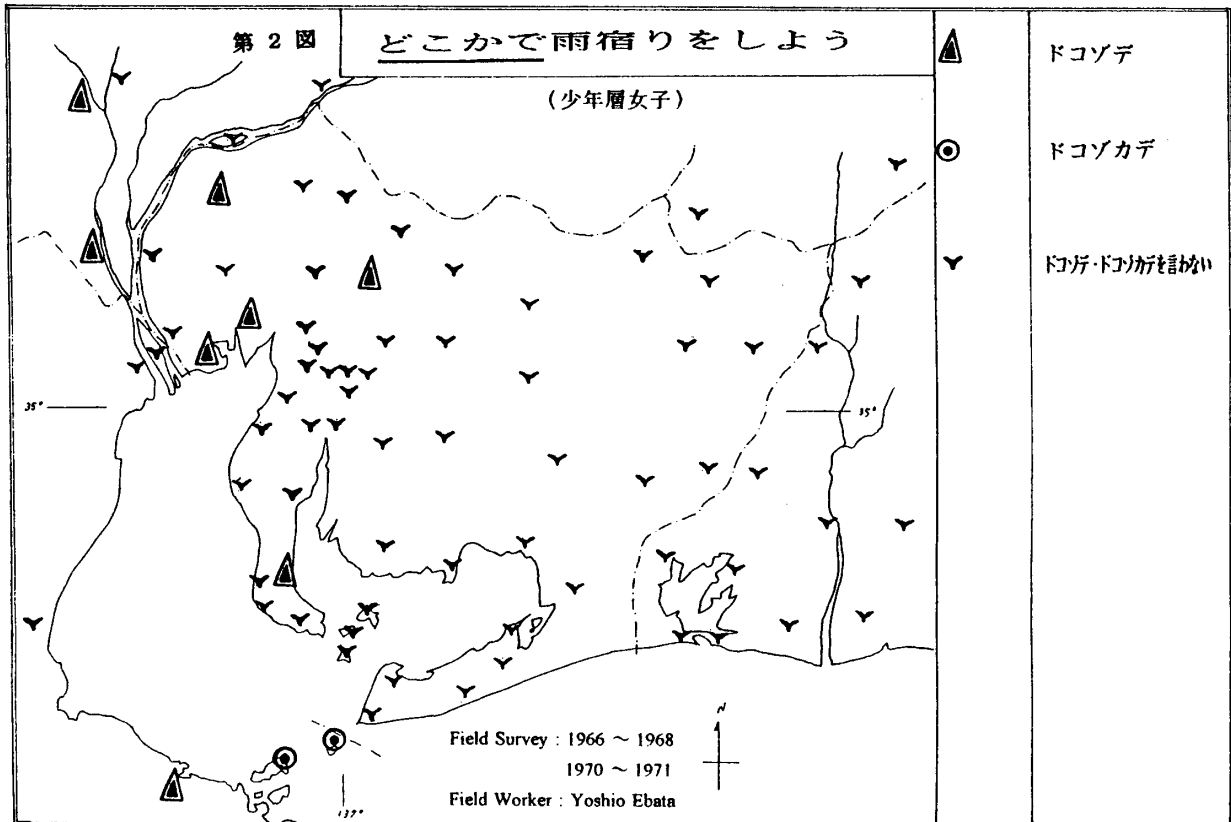
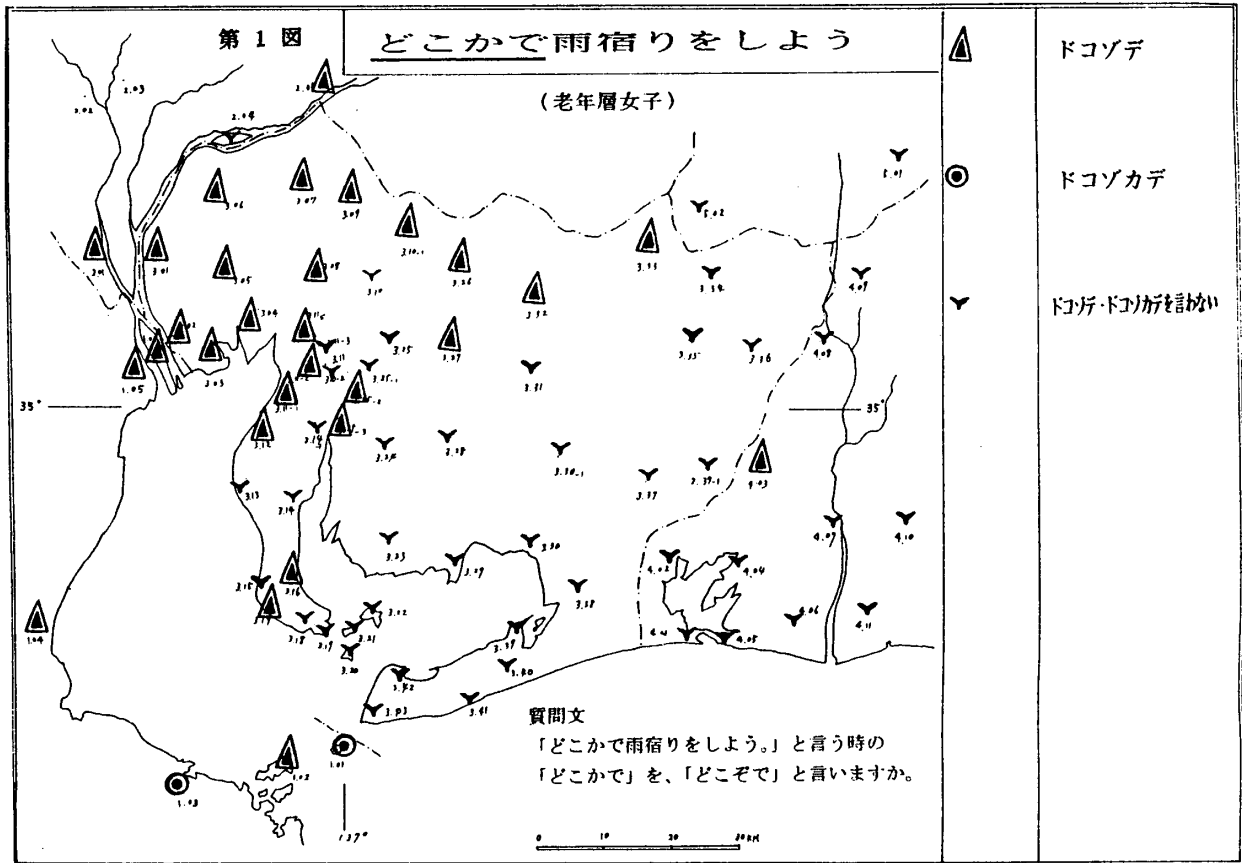
調査資料： 1966年から1968年に江端が臨地調査をして集めた方言資料のみを使用する。また、1970年から1971年に補充調査を実施した。

本稿では、自然会話の中で記録した方言文をも実例として使用する。

言語地図： 愛知県言語地図の老年層と少年層、『方言文法全国地図Ⅰ』の「誰やら」を私的に概括図化したもの。

## 一、第1・2図「どこかで雨宿りをしよう」の方言分布

質問文では、共通語で「どこかで雨宿りをしようという時の『どこかで』を『どこぞで』と言いますか」と聞いている。したがって、回答としては、「ドコゾデ」か「ドココデ」かのどちらかが期待されるものである。ところが、興味深いのは、決して、予想した通りではなくて、「ドコゾカデ」という持って回ったような言い



方が近畿地方には存在していた。たしかに、「ドコゾデ」と「ドコカデ」とが衝突して混交すれば、「ドコゾカデ」という形式になるのは、容易に考えられる。勿論、「ドコカゾデ」という形式は存在しない。たぶん、係助詞の「ゾ」と「カ」との間には、力関係の差があって、前後関係で、譲れない上下の位置づけが決まっているのであろう。それについては、後で言及することとして、今は、地図の解釈を進める。

第1図での老年層では、「ドコゾデ」の分布が三重県と尾張地方の全域とに認められる。名古屋市を中心として濃尾平野には、この古めかしく古典的と見られる言い方が文句無く受け入れられているのである。三河地方の北部にも、「ドコゾデ」の分布があり、飛んで静岡県引佐郡細江町伊目にも、これが見える。ただし、一般に「ドコゾデ」という言い方は、愛知県の東部、つまり、三河地方の言い方ではない。したがって、これは静岡県地方には、馴染みの薄い言い方と言ってよい。

質問文では、「ドコゾデ」の言い方を尋ねているものの、「ドコカデ」の有無については聞いていない。それは、共通語だから、当然使用するものと考えたからであった。しかし、それは間違いであった。できれば、「ドコカデ」の使用の有無についても聞くべきであった。なぜならば、本質的に思索すれば、「どこぞ」と「どこか」は古くからの言い方であり、単純な地理言語学の解釈では、用法が同じ語句が衝突して、優勝劣敗が起きると見られがちである。「どこぞ」も「どこか」も大差なく使用可能なものだからである。それでいて、どうして、西と東とに分布が分かれているのだろうか。その解釈は容易ではないが、解決したい課題である。

第2図の少年層では、「ドコゾデ」の方言分布が、極めて少なくなっている。第1図と第2図とを比較すると「ドコゾデ」の分布の激減には、驚くばかりである。老年層で、尾張地方に著しかったのに、少年層では、わずかな残存分布という有様である。三河地方では、まったく、「ドコゾデ」の分布が消えてしまっている。

その代わりに、「ドコゾデ」と「ドコゾカデ」との両方ともに言わないとする答えが広がっている。では、どういう言い方がその代わりに分布するというのだろうか。「どこやらで」とか「いずこかで」とか、その他さまざまな言い方を推察してみても詮無いことである。発想の無限は、それとして、今は、問題ではない。

見方を変えて、「どこかで」と「どこぞで」とを比較して、どちらが古いかを調べてみる。『日本書紀』に「どこか」があり、「どこぞ」が『伊勢物語』にある。「どこか」の方が少し古い。しかも、「どこか」の方が現在に至るまで、「どこぞ」よりもその使用量が多い。今日

でも「どこぞ」には「古風な印象」が伴い、それよりも、「どこか」の方が「新鮮な印象」を感じさせる。「どこか」の方が「どこぞ」よりも歴史的には古くから使用されているのに、「どこぞ」の方が「古めかしい」感じを人々に呼び起こさせるのは、「どこぞ」が生存をかけた競り合いに負けて、敗退する様を示唆しているからである。

## 二、第3・4図「何かけがでもしたの？」の方言分布

質問文は「泣いている少女に『何かけがでもしたの?』と尋ねる時、どう言いますか。」である。この質問文は、適切ではなかったと思う。「何かおかしい」のような聞き方で疑問詞を受ける「か」を聞けば、確実に「か」の係助詞性が出る。しかし、「何かけがでもしたの?」という文では、「何か」の「か」に、「する」という動詞の対象格の意味が少しく感じられるので、万全さという点では問題があるからである。

それはそれとして、第3・4図は、「どこぞ」と「どこか」だけを取り出して、地図に表したものである。

「ナンゾ」の分布は、老年層においても極めて少ない。「ナンカ」の分布の方がはるかに多い。力関係では、「ナンゾ」ではなくて、「ナンカ」が老年層においても時代の感覚に合っているのであろう。

少年層についても、「ナンゾ」は一地点だけになっている。「ナンカ」ばかりの分布である。少年層では、「ナンカ」が海岸地方に分布していて、山間地には、これが無い。

このような状況をじっくり眺めると、係助詞の「ゾ」が廃れて、係助詞の「カ」に変わっていく過程が読みとれる。

それでは、衰退の一途にあると思われる「ゾ」の用例を掲げてみる。

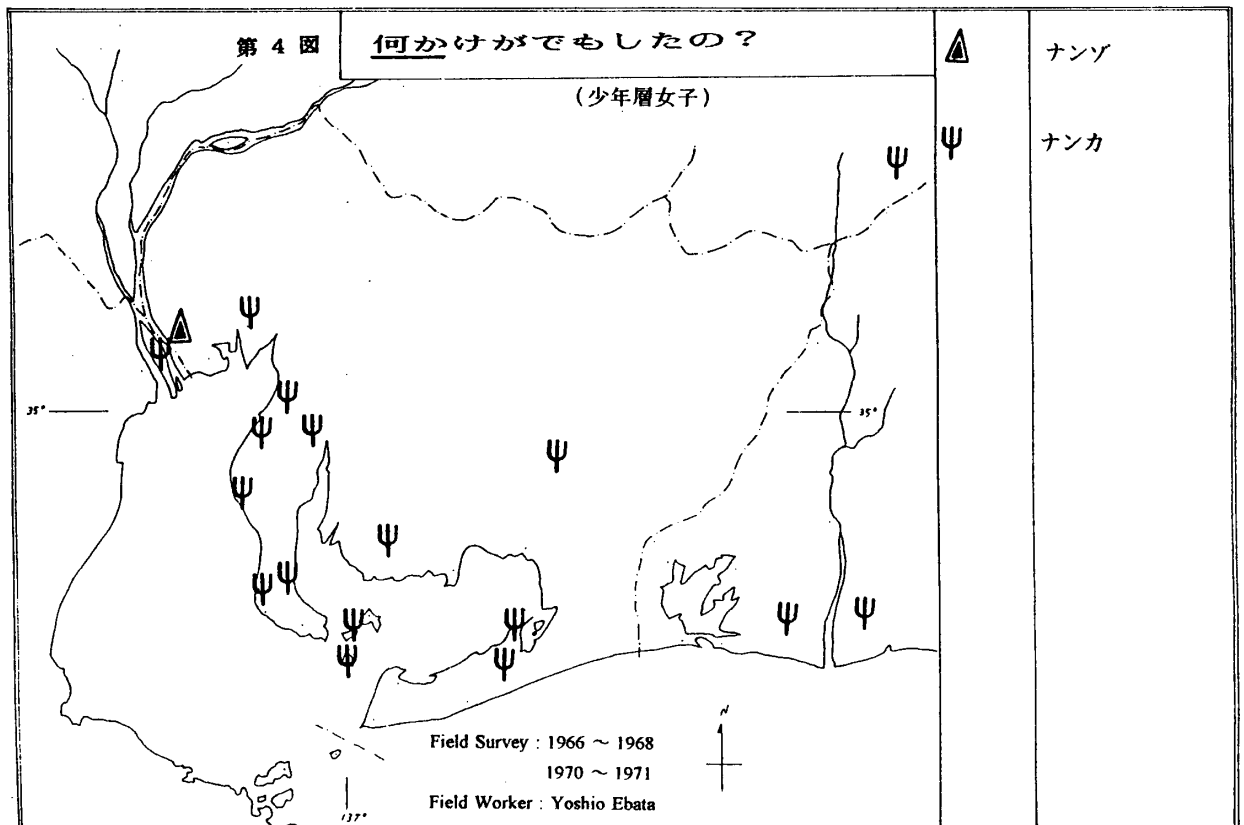
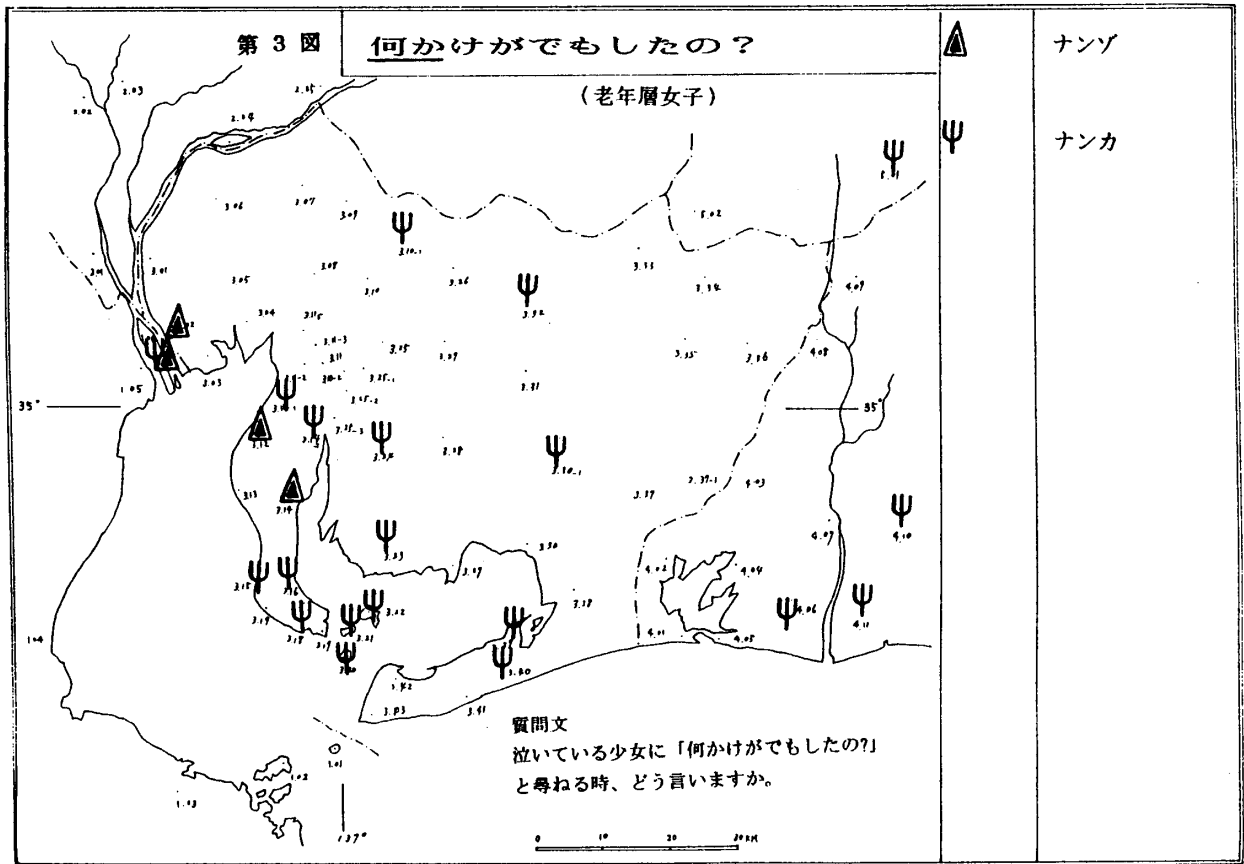
○ワシモ カオ ダイテ ナンゾ エー ハナシオ  
……………私も顔を出して何か良い話を……………。

中年女—青年男、愛知県知多市南粕谷、1973年  
○ナン三。アオカビナゾ アラシン。いいえ。青  
かびなんか生えていないよ。初老女—青年男、愛  
知県知多市南粕谷、1965年

○ナンゾ タベタケヤー……………。何か食べたければ……………。老女—老女、愛知県海部郡甚目寺町、  
1967年

以上のような例でも分かるように、「ゾ」には、古めかしさが感じられる。

ところで、疑問詞の中でも古めかしさの感じられるものとしては、「どれゾ、どこゾ、だれゾ、なんゾ、い



つゾ」がある。稀にこれらが聞かれなくはない。ただし、使われることがほとんど無いであろうと思われるものに、「いくつゾ、いくらゾ、いく日ゾ、何人ゾ、どうしてゾ、なぜゾ、どれゾ、どんなゾ」などが予想される。「ゾ」を承接させたこれらの言い方は、今では不自然な感じがする。愛知県地方でこれらを聞いたことが無い。しかし、「カ」を承接させれば不自然ではなくなる。すなわち、「いくつカ、いくらカ、いく日カ、何人カ、どうしてカ、なぜカ、どれカ、どんなカ」などは自然な言い方である。このように、「カ」の用法は広い。その広さから見て、「ゾ」は廃れていくが、「カ」は生き残っていくということが分かる。

おもしろいことに、「ゾ」が「どう」と結びついて「どうゾ」という言語形式になると、全ての年齢層で使用される。しかも、これは共通語としても「どうぞよろしく」などというあいさつになっている。愛知県地方の方言でも、それは普通に聞かれる。

たとえば、次のような例がある。

○アシタ セスト オモダ。ドーゾ オネガイシマス。明日しようと思うのだ。どうぞ、お願いします。中年男—中年女、愛知県知多市南粕谷、1965年

○エー ヨ。ドーゾ。ベツニ ナンニモ ナイ。(長居しました、との詫びへの答え) いいよ。どうぞ。別に何も無い。青年女—青年男、愛知県知多市南粕谷、1965年

このように「どうぞ」だけは、誰もが使う言い方になっている。

すなわち、疑問詞に「ゾ」が続く言い方が少なくなり、その代わりに「カ」が続く形式の方が優勢になってきているのに、「どうぞ」は、まだ不自然な感じを、人々に与えないでいるのである。

しかし、「どうぞ」と「どうか」とが類似の意味であれば、「どうか」の方に収斂せざるをえないだろう。かすかに、「あいさつ」に残る「どうぞよろしく」のような「ゾ」に、消えかけている「ゾ」の形骸が見られるのである。

次に「ゾ」と「カ」とを、全国的な方言分布状況の中で考えてみる。

### 三、第5図「誰やら(来た)」の方言分布

国立国語研究所の編集した『方言文法全国地図』に「誰やら」の言語地図がある。第5図は、筆者がその地図の「ダレゾ」と「ダレゾカ」だけを取り出して作り直したものである。

「誰やら」の地図の全体状況では、まず、「ダレカ」

類の全域的な分布がある。これが最も古い分布であろう。そして、「やら」が指定・断定性を示すので、それに伴い、「ダレダカ、ダレジャヤラ、ダレヤラ」などが分布する。そのような複合的な地図になっている。

筆者が問題にしたいのは、「誰カ」と「誰ゾ」との分布関係である。その対立を見ると、第5図に表した「ダレゾ、ダレゾカ」以外には、「ゾ」の分布が無い。その他は、日本列島のすべてに「誰カ」が分布している。それに対して、「誰ゾ」の言い方は、近畿地方と四国地方及び尾張地方・広島県・島根県にのみ分布するものだと言えそうである。たとえば、

○ナンゾ コン カー。何か、来ないか。中年女—中年女、愛媛県宇和島市日振島明海、1981年  
のような例を得ている。しかし、「ゾ」の例は少なく、たいていは「カ」の例ばかりである。

次に挙げるのは、係助詞「カ」の例である。

○チンカ デテタンダッテ ㊦。何か出て行くのだったね。青年女—青年女、愛知県一宮市大和町妙興寺、1967年

○ダレカニ キーテ ミナハレ。誰かに聞いてみない。老女—青年男、奈良県吉野郡天川村、1973年

○ドッカ ニタ トコ アル ヨ。どこか、似た所があるよ。60歳女—中年男、京都府北桑田郡美山町鶴ヶ丘、1987年

○センセーカ アレ ドコカ シラン。先生って、あら、どこ出身かしら。愛知県海部郡弥富町平島新田、1967年

このように、「カ」の用法は方言でも共通語でも、同じように頻繁に聞かれる。

ところで、大野晋博士はご著書の『係り結びの研究』の中で「第四章 ゾとナム」を設定し、係助詞の「ゾ」は、終助詞「ゾ」の倒置だと言われる。すなわち、「倭の国は言霊の佐くる国ぞ」という形式があり、その倒置として「うまし国そ、あきづ島大和の国は」があるのだとされる。また、「ナム」についても、時代を追って、多くの用例を分析された結果、

「和歌に用いられないナム、新興の平家物語などの語りにも使われなかったナム、相手に対して下から上への心づかいを示すナムは、鎌倉時代から室町時代にかけての下剋上の時代、下のものが上のものをうち倒すという風潮の時代に消滅していった。それは、自然の成行きであっただろう。」

と言われる。しかし、それは正確だろうか。筆者は、このような劇的な逆転に疑問を抱いている。

すなわち、歴史的な変化というものは、ごく平凡な事態であり、いつの時代にでも起こりうることでなく

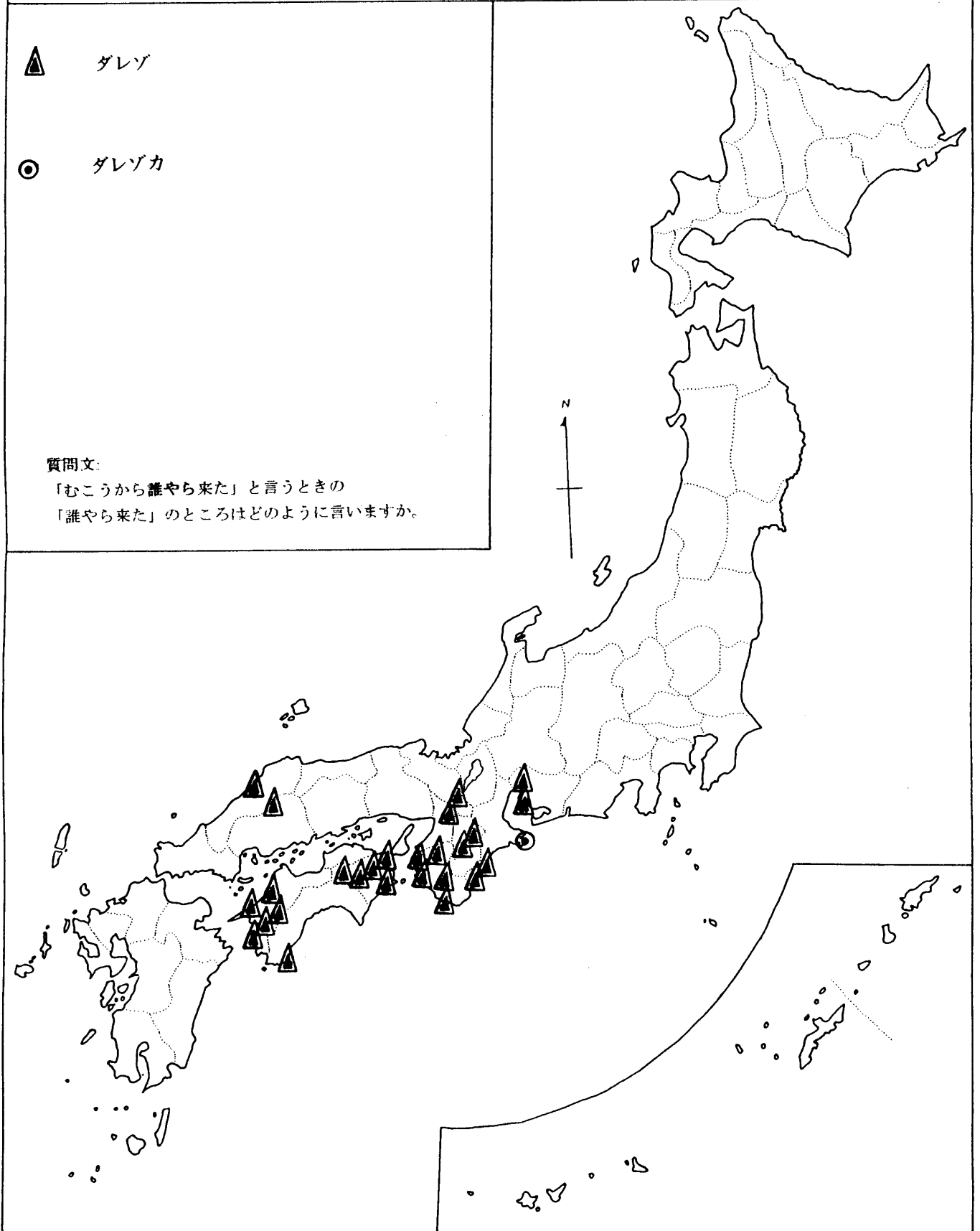
第 5 図 「誰やら（来た）」（『方言文法全国地図』による）

▲ ダレゾ

◎ ダレゾカ

質問文:

「むこうから誰やら来た」と言うときの  
「誰やら来た」のところはどのように言いますか。



てはならないし、現在でも同じような現象が継起しているはずのものであると考えている。したがって、下剋上の時代だから、倒置が起りえたというのは、不自然だと思う。そうではなくて、もともとの係助詞が、終助詞へと転成していったまでのことだと解釈したいと考えているのである。歴史の解釈を面白くしようとすれば、倒置法の導入が興味深い。しかし、方言の文末詞が無尽蔵に生成されるのを見ていると、文末決定性の強固さは揺るがない。人々は他者への思いを文末でひたすらに訴え、言い終え難さに泥む。その未練の様が文末詞に見える。述部の後に文末詞が来て、情念の世界が続く。これこそが正に、日本語らしさなのである。筆者には、倒置などというレトリックを認めることはできにくい。このことについては、別に稿を改めて述べたいと思う。

次に、係助詞の「ゾ」が終助詞の「ゾ」の方言分布と密接な関連を持つことを証明したいと思う。

#### 四、第6・7図「良いゾナ・そうだゾネ（文末詞）」の方言分布

文末の終助詞を藤原与一博士は「文末助詞」または「文末詞」という術語を使用なさる。現代語の研究においても、この術語は広く使用されるようになった。文末詞という場合に、助詞に留まらず語句や文に相当するものまでも含めるので、文末詞と言う方が適切であろう。しかも、助詞と言え、詞を支える不可分の辞という機能に当てられた用語である。しかし、文末詞の多くは、陳述の最後に付加する情念であり、叙述成文とは無関係である。コミュニケーション機能を主な働きとしているものである。

さて、本稿では、「ゾ」を、ある時には終助詞とも言い、ある時には「文末詞」とか「文末助詞」とか言うてきた。それは、文法論の普及が目的ではなく、多くの人々に筆者の意見を理解していただきたいために、不統一であることを承知の上で、種々の術語を使用しているのである。実は筆者の術語である「話繫詞」の方が適切であると思考している。

ところで、第6・7図は、愛知県地方の文末詞「ゾナ」と「ゾネ」の分布図である。質問文は、『「いいですよ」と言う時、『良いゾナ』といますか。近所の心やすい人の言葉にあいづちを打って、『そうだゾネ』といますか。』である。

「ゾナ」の老年層図では、三重県や愛知県の尾張地方から三河地方の北部に、これが分布している。少年層図では、一地点だけの分布になっている。また、「ゾネ」の分布は、老年層では、三河地方の全域に普く存

在する。少年層には、「ゾネ」が皆無なのは注目される。

大野晋博士は終助詞の「ゾ」の意味を「教示・報知・説明」だと言われる。日本語の歴史的な過程を見れば、確かにそのような意味がある。

なぜ、第6図から第7図にかけて、「ゾナ」や「ゾネ」が激減することになったのだろうか。それは、「ゾ」の「教示・報知・説明」などの「しつこさ」を嫌ったからである。「ゾナ」の「ゾ」を省略し、「ゾネ」の「ゾ」を省略して単純に「ナ」と「ネ」にすることが可能である。それは共通語と同じものになるはずである。もともと、「ゾ」には男っぽさがあり、女には使い難いものであった。それで、「ゾナ」や「ゾネ」という複合形に仕立てることによって、品位を高めたのである。敢えて持って回った意味に仕立てたのが災いして、古風な慇懃さが際だつことになってしまった。こうなると、場面が限定されて使いにくいものになる。「ゾナ」も「ゾネ」も若者の言葉から縁の遠い存在になってしまったのである。

しかし、古代以来の終助詞「ゾ」は健在なのであり、「ゾナ」「ゾネ」は消えても「ゾ」は消えることはない。ただし、「ゾ」は、女言葉ではない。歴史上では、いつも終助詞として使用される時には野卑な感じが付いていた。共通語でも、終助詞の「ゾ」は粗野な感じがある。

たとえば、次の例を見よう。

○マ<sup>ン</sup>ダ サ<sup>ン</sup>ジ<sup>ツ</sup>ッ<sup>プ</sup>ン アル <sup>ゾ</sup>。まだ30分あるよ。児童男一児童男、愛知県知多市南粕谷、1965年

○ソ<sup>ノ</sup> アン<sup>バ</sup>イ<sup>デ</sup> タ<sup>ム</sup> <sup>ゾ</sup>。その按配で頼むよ。初老女一中年男、愛知県知多市南粕谷、1965年

○ワ<sup>シ</sup>ガ<sup>レ</sup>ー テ<sup>ガ</sup>ミ オ<sup>ク</sup>レ<sup>タ</sup> <sup>ゾ</sup>ナ。私の家へ手紙を下さったわよ。老女一青年男、愛知県知多市南粕谷、1965年

このように「ゾ」や「ゾナ」などの文末詞は、同等または年の下の者へのもの言いに使用される。あるいは、子供同士の会話で使用される。

しかしながら、使用場面は、限定されてはいても、それが必要不可欠な文末詞であることは動かない。

たとえ、係助詞の「ゾ」が無くなっても、文末詞の「ゾ」は容易には消えないであろう。「ゾナ」や「ゾネ」は消えても共通語の「ゾ」だけは、残る。野卑な感じを表すための文末詞として、「ザ」「ジ」「ゼ」「ゾ」は必須なものだからである。かりに「ゾ」が消えても「ゼ」が残る。その逆もありうる。

最後に、係助詞の「ゾ」の分布図であるところの第1・2・3・4・5・6図の全ての分布を重ねてみよう。すると、「ゾ」の分布が愛知県地方では、尾張地方





に限定されるということと一致する。この事実が非常に重要である。

これは、係助詞「ゾ」の分布と文末詞（終助詞）「ゾ」の分布との関連性、共通性を示す証拠と言えるのである。

すなわち、係助詞の機能が次第に後ろへ移行して終助詞の機能に転成していったと考えられる。このような「語順間推移の法則」に従って、係助詞の「ゾ」が終助詞の「ゾ」になっているのである。

係助詞としての「ゾ」は、勢力が弱くなっても、終助詞の「ゾ」の方はまだ力が残っている。しかし、歴史的に陳述副詞が呼応関係の乱れをきたしているように、係り結びの関係も方言社会において、激減している。

## 結 論

以上、本稿をまとめると次のとおりである。

- ①係助詞「ゾ」の方言分布と終助詞「ゾ」の方言分布とを解釈することによって、両者の必然的な関連を明らかにした。
- ②大野晋博士はまず初めに終助詞「ゾ」が存在し、それが倒置を起し、係助詞ができたと言った。筆者はその説に疑問をもち、係助詞が順次文末に移行して、終助詞になったとする新しい考えを提案した。
- これを筆者は「語順間推移の法則」と命名した。
- ③「どこゾ」と「どこカ」の方言分布の抗争では、

古態の「どこカ」の全国的な分布と多彩な承接形式を持つ「カ」に対して、新しく発生して波及しようとした「ゾ」は、近畿・四国・愛知・中国地方に伝播しただけで、勢力の衰退をみせている。同様に、方言文末詞「ゾナ」「ゾネ」の分布も、係助詞の貧弱さと呼応して、弱々しいものになっていることを発見した。

## おわりに

「ゾ」と「カ」だけでなく、これら以外にも多くの係助詞と相関する終助詞についての密接な関係を、今後も研究していかなくてはならない。

ちなみに、係助詞の「テヤ」が接続助詞の「テヤ」に転じ、さらに終助詞の「テヤ」へと推移し、行き場を失って、語頭の発語へ推移しようとする日本語方言の注目すべき現象が、次の拙文で証明されている。

江端義夫「日本語方言における語順間推移の法則—「テヤ」について—」（『山田達也先生喜寿記念論文集』2002年7月刊行予定）「ゾ」の場合も「テヤ」の場合も、同じ推移法則に基づいている。

## 参考文献

- 大野晋：『係り結びの研究』1993年、岩波書店  
国立国語研究所：『方言文法全国地図』Ⅰ、1989年、大蔵省印刷局